

Special Interview

[特別対談 学び舎で語り合う]

お二人の対談の全文は
こちらからも
ご覧いただけます。

とくだまさひろ

みかみじろう

得田真裕さん × 三上次郎先生

作曲家

教育学部 名誉教授



とくだまさひろ
1984年10月2日生まれ。鹿児島出身。長崎大学教育学部芸術文化コースを卒業後、ゲーム制作会社を経て、現在はワンミュージックに所属。テレビドラマ、ドキュメンタリー番組、映画など幅広いメディアで活躍中。主な作品は映画「劇場版 奥様は、取り扱い注意」、ドラマ「MIU404」「アンナチュラル」「silent」など。

『第48回 日本アカデミー賞』（2025年）の優秀音楽賞を受賞した作曲家の得田真裕さんは、教育学部の卒業生です。

2026年3月、恩師である三上次郎教授の退職に合わせて対談が実現しました。
懐かしい学び舎で再会したお二人は、どんな思い出を語ったのでしょうか。

三上先生 得田君が1年生の頃から、授業の枠外で和声などを教えていましたね。そもそも私は才能というものを信じていません。あるとすれば持続する力ですが、得田君はそれを持っていました。

得田さん ありがとうございます。より多くを学ぼうと思った時、自ら動く姿勢が大事ですし、それに応えてくださった三上先生と出会えたことが幸運でした。

三上先生 入試の時のことはよく覚えていますが、得田君はギターを抱えてやって来て、試験室では靴を脱いで弾きました。

得田さん 自宅で練習する時には靴を履かないので、足を台に乗せた時にソールの高さが気になったからです。失礼だと思いつつ脱がさせていただきました(笑)。

——学生を育てる中で、モットーとされてきたのはどのようなことでしょうか。

三上先生 作曲の分野では、教えようとした途端に自分の世界を押し付けてしまいがちです。そうすると、その教員の世界の枠から出にくくなり、結果として学生の成長は止まりますから、得田君にも作曲の方法を教えた記憶はほとんどありません。自由の尊重は無責任に放っておくこととは違います。教員である自分の後を追うのではなく、違う自分の世界を見つけて自由に飛び出して行って欲しいと思っています。

た。私が書いた曲と得田君が書いた曲を比べると、まったく世界が違うことが分かるでしょう。それでいいんです。——得田さんは、年間どれくらいの曲数を作曲されているのでしょうか。

得田さん 年によって波はありますが、だいたい150曲くらいでしょうか。——作曲するうえでどのようなことを大切にされていますか。

得田さん 私が活動しているジャンルは、ドラマや映画などに付ける劇伴音楽ですから、自分のオリジナルのものではなく、作品の世界観を崩さない曲作りが求められます。その中で監督から提示された要望のさらに上を行けるように、自分なりのエッセンスを加えたり提案をしたりします。お互いにアイデアを出し合える関係性を保つことも大切です。

——映画『ラストマイル』で日本アカデミー賞の優秀音楽賞を受賞されました。どういった点が評価されたと思いますか。

得田さん チーム力が大きかったのではないのでしょうか。『ラストマイル』は『アンナチュラル』『MIU404』に続く、三部作の集大成でもありました。監督、脚本家といった多くのスタッフの思いが三つの作品を通して結集したからこそ、心を動かす音楽を生み出すことができました。

——行き詰まることもあると思います。

得田さん クリエイターの多くが発想や閃きを追求する中で、不要なとこ

ろまでこだわり過ぎてそうなることはあります。締め切りは大変ですが、逆に言えば、ゴールがあるから「ここまで」と区切ることが出来ますし、そこまで全力で頑張ろうと思えるエネルギーになっているのかもしれませんが。——三上先生は教員人生をどのように振り返りますか。

三上先生 以前勤めていた大学を含めると、教員人生は40年になりました。この40年の星霜の中で私が感じているのは、色々な意味で時代は変わったという印象です。得田君がいた頃の彼らは本当に自由でした。音楽棟で寝泊まりしながら勉強していましたからね。

得田さん 教室は大きな音が出せるので、自宅よりも大学にいる時間の方が長かったのは確かです(笑)。朝早く大学に来ると、三上先生が弾くピアノの音が聴こえてきて、作曲や研究に取り組みむひたむきな姿を感じました。自分も頑張らなければと意欲がわいたことを覚えています。

——先生から、教え子の皆さんに伝えたいことはありますか。

三上先生 思い出を大切にしてほしいということ、一生懸命に生きてほしいということです。自分自身が満足できる作品を書けるのは若いうちだけです。得田君もこの先の10年が重要な時期になるでしょう。他人だけではなく、過去に置

いてきた自分とも勝負しなければなりません。これはかなり辛いことです。自分の衰えを目の当たりにする時期が、いずれは訪れるということ覚えておいて欲しいですね。

得田さん ありがとうございます。できるならばずっと過去の自分を越えていきたいです。時間の制約など言い訳にしがちですが、先生のお話を聞いて身が引き締まりました。

——得田さんから、三上先生へメッセージをお願いします。

得田さん 時代が進むにつれて変化していった教育現場で、音楽の世界を志す学生たちを育てることは容易ではなかったと思います。本当に感謝の言葉しかありません。私自身、大学時代を振り返ると自由な学風に助けられました。そして先生と学生の結びつきなど、都市圏の大学では得られなかった経験が私をつくってくれました。それぞれの場所や分野で輝く卒業生の皆さんの姿が、長崎大学で学ぶ後輩たちの後押しになると感じています。

